
竹の音

細河いをり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竹の音

【Zコード】

N9715L

【作者名】

細河いをり

【あらすじ】

もう、何十年も昔の話だ。農家の末っ子として産まれた私は竹藪で竹の音を聞いた。それは、母が息子を思う気持ちの表れたものであつた……

もう、何十年も昔の話だ。

私は農家の末っ子として産まれた。昔の家がそうであつたように、私には多くの姉や兄がいた。もつとも、彼らは私がまだ幼い頃に早くと家を出てしまつた。出てしまつたというが、それが、まだ貧しい時代の農家ではほとんど当たり前の出来事だった。

父は、わずかの田畠といくつかの山。そして、時折牛を飼つて、我々子どもを養育した。多少は政府が農家に補助金を出すようになつていたが、それでもやはり農業で暮らしをしていくのは難しいことだった。父はろくに着るものも持たず、日々泥まみれになつて土と暮らしていた。そんな時代のことだ。

その時、私たちは父の母、つまり私にとっては祖母に当たる人と一緒に暮らしていた。この祖母も、毎日父と共に田畠に出て、相当な年齢となつていたが、土を耕し、作物の手入れをした。そして私の母も一緒だった。今と違つて、そのころは、誰もが畠に出て、日々働いていた。幾ら働いても仕事はいくらでもあつた。そんな、貧しい時代だった。

朝、畠仕事を終えた後、祖母はリヤカーを引いて町に出る。リヤカーには山のように野菜が積み重なつていた。全て、市場には出荷できない程度の品物だった。祖母はそんな野菜達を持つて、町屋の人々の間を回り、幾らかの収入を得ていた。多少多く野菜が売れた日には、私に少しの駄菓子を買って来てくれた。一円や二円といった、今の生活からすれば考えられない値段の駄菓子だが、私はそれが幸せな時間だった。

ある年のことだった。もう祖母は相当な年齢になつっていたはずだ。私も小学校に上がつていて、一番上の姉にはもう子どもが産まれていた。町で暮らしていた一番目の姉がまもなく嫁に行くというような話が出ていた。そんな時期だった。野菜を買って帰った祖母が、

家に帰る前に、時折裏の竹藪へと足を進めるのを見た。

不思議だった。祖母はまるで人目を避けるようにしていた。家の横には藪路があり、大きな竹藪が山の斜面に沿って広がっていた。祖母はそこに消えていくのである。もともと、長い時間ではなくて、まもなく降りてくるのだが、子ども心ながらそれが不思議だった。

五月の風が涼しい季節だった。その日は学校が早く終わり、私は昼前に家に帰った。母が作り置いて水屋に入れていた昼飯を平らげていると、丁度祖母がリヤカーを引いて帰ってきた。リヤカーを納屋に置いて、彼女の姿は竹藪の方へと消えていった。

まもなく、彼女は戻ってきて、家の裏口で、井戸の水を汲んで手ぬぐいを洗う音が聞こえてきた。祖母のいつもの習性だった。私はふと思った。祖母が何をしていたのか知りたいと思った。私は草履を履くと、正面の玄関から飛び出して、家の横の路を走り、竹藪へと向かった。

五月の竹は、もう筍の季節を終えて、硬い青竹へと姿を変えている。しつかりとした太く長い竹が何本も斜面に林立している。薄暗い視界の上の方が、葉の隙間から広がつて青い空が見えていた。

初夏の涼しい風が吹き付けてきた。頭上で竹の葉が風にそよぐ音がする。それが子どもの私には不気味に思え、思わず肩を縮めた。

そんな、葉が風にそよぐ音に混じって、どこかで笛のように、美しく澄んだ音がする。

(なんだろう)

子どもらしい好奇心に動かされて、私は右往左往した。風が吹く度に竹の葉が揺れ、幹が揺れる。そして、澄んだ音色が風と葉の音に紛れて、ある一定のメロディーを醸し出していた。

私は何度も辺りを見回し、耳を澄ました。そして、見つけた。ある古い竹の一本に、切れ目が入れてあるのを。そして、風がその切れ目を通る度に、あの美しい音色がするのだった。

(この、竹は?)

私はその竹の幹を押した。子どもの力ゆえ、そう大きく動かせたわけではない。それでも、幹は揺れ動いた。動いた時に、チャリンと音がした。何か、硬化のようなものが動いた感じだつた。

(お金?)

そうだ、と思った。そして、それが何だが判つた。祖母は、わずかな稼ぎを少しずつ、この竹の内側に隠していたのである。祖母が売る野菜は、中身はともかく形は悪かつたから、値段も安く、従つて稼ぎも安いものだつた。祖母はその売り上げのいくらかを私の母に渡しているようだつたが、余つた分を何に使つているかは知れなかつた。彼女は贅沢などまったくしない人だったので、その金がどこに消えていいか判らなかつた。しかし、その謎は今、氷解したのである。

だからといって、私がどうにかするはずもなかつた。竹の幹は丈夫なものだつたし、私もまた、祖母のお金に手を付けるようなふしだらでもなかつた。私はただ納得するだけで満足した。

私が家に戻ると、祖母は相変わらず裏口の井戸で野菜を洗つている所だつた。

「今日はあつという間に売り切れてな。もう一度、出かけてくらあ」私を見ると、祖母はそんなことを言つた。その後、私は言われたままに、おとなしく留守番を務めたのである。

祖母のお金の使い道はやがて知れた。その秋になつて、一人目の姉が結婚することになつた。昔は冠婚葬祭全てを家で行い、この時も姉の夫となる人の家で、婚儀は行われたらしい。らしいというのは、子どもの私はそれに対応していなかつたからだ。

ただ、その婚儀に出かける時に、父が立派な背広を着ていたのを、私はよく記憶している。そしてその背広は、貧しい暮らしをしていた父が、今まで一つも持つていないものだつた。

祖母は、わずかな稼ぎを溜めて、父のために一着の背広をあつら

えたのだった。

その婚儀の晩に父はへべれけになつて帰つてきた。そして、帰るなり言つた。「誰もがな、俺の背広を、誉めてくれるんだ。おかげで、あの子にも恥をかかせないですねんだ」と。

その頃の農家は背広を持つてゐる者などまずいなかつたから、父がいかに面目を施したかよくわかる。それには祖母の、息子を思う温かい気持ちがあつた。

その婚儀から数年して祖母は亡くなり、父も私が成人する頃には世を去つた。私も社会に出て働き、毎月決まつた額の給料をもらい、一人残された母の面倒を見る暮らしどとなつた。

たまに休日、私は竹藪に入る。初夏になると、あの時と変わらない風が吹く。もう、竹を鳴らす音はしないし、祖母も父もない。しかし、その度に私はあの時のことを思い出して、子ども時代の心に戻る。そして、もうすっかり年老いた母の元で、一人の子どもに戻つて時を過ごすことができるのである。

(終)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9715l/>

竹の音

2010年10月8日14時42分発行